

氏名(本籍)	えの もと たか お 榎本貴夫(千葉県)					
学位の種類	医学博士					
学位記番号	博乙第470号					
学位授与年月日	昭和63年9月30日					
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当					
審査研究科	医学研究科					
学位論文題目	Minor head injury and its clinical significance. (軽症頭部外傷とその臨床的意義)					
主査	筑波大学教授	医学博士	中西	孝雄		
副査	筑波大学教授	医学博士	秋貞	雅祥		
副査	筑波大学教授	医学博士	工藤	典雄		
副査	筑波大学教授	医学博士	小泉	準三		
副査	筑波大学教授	医学博士	松下	松雄		

論 文 の 要 旨

＜目 的＞

近年交通事故等の増加に伴い頭部外傷の数も増しつつあるがその病態は必ずしも理解されているとは言えない。頭部外傷は開放性と閉鎖性に分けられており後者は我が国において荒木により四型に分類されている。すなわち意識喪失の無いⅠ型、意識喪失6時間以内のⅡ型、6時間以上もしくは巣症状をもつⅢ型、症状の進行するⅣ型である。この中、軽症頭部外傷は多く遭遇する疾患であるため、それらの受傷時における中枢神経系の病態生理及び臨床的予後を解明することを目的とした。

＜対象及び方法＞

本論の主題である軽症頭部外傷は荒木Ⅰ型及びⅡ型と定義した。対象は軽症頭部外傷を受けたもので受傷後1週以内に脳波とCTが施行された610例である。既往症のあるものは除外した。受傷後けいれんに関してもアンケート調査を行った。その他異なる母集団でCT上大脳基底核損傷を有する症別を検討した。

＜結 果＞

第一章から四章までは同じ610例に対して種々の観点から検討を加え、以下の結果が得られた。初回脳波の異常率は小児(280例)では42.5%に及んだが成人(330例)では20.3%であった。年齢的には3歳から14歳の間で異常が高率に認められた。基礎波の異常はほぼ覚醒時に、突発波の異常は

軽睡眠時に特有に認められた。最も多く認められた異常は小児では後頭部を中心とする高振幅徐波であり、成人では後頭部基礎波の低振幅非律動化であった。これら脳波異常の経過を詳細に観察すると、直ぐ治るもの、数か月を要するもの、1年以上もかかるもの、の三郡に分けられたが改善の遅れる群に突発性異常の頻度が高率であった。同じ症例、計610名に対して記名アンケート調査を行い、受傷後の症状、特にけいれんの有無について調査を行った。59.1%の回答を得ている。この中でいわゆる受傷後症候群はあまり認められなかったが、受傷後けいれんは12例に認められた。それらの脳波は、3例は正常、4例は境界、5例は異常脳波であった。うち2例は繰り返される遅発性のけいれん、すなわち、てんかんが観察された。発生率は0.55%であった。脳波でも、てんかんの発生は予知できず、服薬の効果も実証できなかった。神経放射線学的には現在最も正確な情報を与えると考えられるCTを利用して調査研究を行った。異常率は低く6.4%であった。異常の内容としては、小児ではくも膜下出血が多く、成人では硬膜下血（水）腫、脳挫傷、脳内血腫など比較的局所的な病変が多く認められた。第五、六章では軽症頭部外傷の特殊型として外傷性大脳基底核損傷例を扱った。本論の対象は前章までのものとは異なるものである。この中で7例の小児例を観察し、傷害の発生に一定の機序があることを見出し本症の病態生理を、中大脳動脈からの穿通枝の前方伸展にもとづく内膜の損傷、閉塞が原因であると推論した。第六章では同症の成人例を検討したが上記機序では説明し得ず、小児とは別のメカニズムが働いていると結論した。そしてこの病態を小児頭部外傷における特殊病態として位置付けた。このように頭部外傷受傷時には軽症とはいえ種々の変化が生じており、その取扱いには慎重な配慮が切に望まれるものと考えられた。

審 査 の 要 旨

交通事故などによる頭部外傷が年々増加し、社会的にも問題となりつつある状況であるが、本論文 minor head injury の多数例（小児280例、成人330例）について、脳波、CT スキャンなどによる経過観察を行い、予後判定に有益な客観的指標を見出している。

また、外傷による得意な大脳基底核損傷例の発症機序についても検討しており医学的のみならず、社会的にも価値ある研究論文である。

よって、著者は医学博士の学位授与を受けるに十分資格ありと認める。